



史料館だより
第14号
1989・12・30

編集・望月友二
発行・神戸灘江浩

史料館研究員 望月友二
平成
神戸市東灘区深江本町3-1-5-1
電話(078-453-4986)

史料館所蔵の唐箕について(2)

史料館研究員 望月友二

(3) 農具商京屋について
史料館所蔵の唐箕は、大阪農人橋(現大阪市中央区)で農具商を営んでいた京屋で製作されたものである。それでは京屋はいつ頃から存在し、どのようない農具商であったのかについて探っていきたい。

「東区史・経済編」の中では、「遠く豊公時代から農人町で製造販売していたもので、(略)明治初期の項には農人橋(丁目)に京屋七兵衛・同清兵衛・同治兵衛、また農人橋詰町に(略)と、唐箕及び万石とおしが豊臣秀吉の時代(桃山時代)から製造されていたことを記載し、明治初年頃には農人橋に京屋が存在していたことを明らかにしている。ところが豊公時代から農具商が存在したという内容が、「東区史・経済編」では何の出典によつての記載かが不明のため、京屋の存在を明治初年にしかさかのぼることができない。

しかし芳井敬郎氏の「農具商についての民具論的考察」の論文によると、農人橋京屋七兵衛の名が元禄七年(一六九四)十月の水帳に初出するといふ。

これによつて、農人橋に京屋の存在が確認された時期を、少なくとも元禄年間までさかのぼることができよう。

さてそれ以前の年代になると、大蔵永常の「農具便利論」の中に、踏車の製作について、「寛文年中(一六六一~一六七二)より大坂農人橋の住、京屋七兵衛、同清兵衛といふ人(略)と記され、

推定の城ではあるが、京屋の存在を豊臣秀吉の時代にさかのぼることはできなくとも、農具便利論の記載内容、そして千齒抜き・万石通しの発明や唐箕の導入が元禄時代以前に考えられることがわかった。京屋の名が水帳に初出する元禄七年より、もう少し以前の寛文年間にまでさかのぼつても良いのではないだろうか。

これらの品は当時の値段で言えばかり高価なものであった。それらを取り扱うことを考えて、農具京屋の規模の大きさが容易に想像される。

(つづく)

① 東区史・経済編 一九四一年
② 芳井敬郎「農具商についての民具論的考察」
『日本民俗文化研究所調査報告』第八集

一九八一年

③ 大蔵永常「農具便利論」『日本農業全集』第十五卷
④ 唐箕の導入時期は、従来の説では元禄年間とされてきていた。しかし会津農書(貞享元年刊)では、すでに唐箕の使用が、貞享の頃(一六八四年)には行なわれていたという。

⑤ 「浪華百事談」「日本隨筆大成」第三期第一巻一九二九年

⑥ 「守山市史」上巻 一九七四年



唐箕 寺田謙三蔵
大根上とうみの広告パンフレット
幅23 横17cm
大坂農人橋京屋治兵衛行

東灘考古学文献目録稿(二)

史料館調査員 柏原正民

二、大正から昭和十九年まで

ここ数年を振り返ってみると、藤ノ木古墳や吉野ヶ里遺跡に代表される数多くの考古学に関するニュースがマスコミを賑わせた。このような「大発見」も含めて全国各地で行なわれた発掘調査の総数は、一年間に四、五千件にも上るといわれている。

現在行なわれている発掘調査の大半は、研究目的の調査ではなく、開発などに伴う調査であるが、たとえどのような調査であつても成果の記録を後世に残すことが原則である。発掘の記録は、報告書として公開されるべきと言える。

大正八年、本格的な文化財保護の法律である「史蹟名勝天然記念物保護法」が制定されると同時に、全国的にその指定および調査が進められることになつた。これを受けて、兵庫県でも大正十五年に委員会を置いて調査が始められ、その成果は現在の調査と同じように「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書」(全十六冊)にまとめられ、刊行された。古墳、陵墓、寺社などの史跡や名勝、天然記念物の調査研究がその主な内容であるこの報告書の第四輯には、渡辺多仲氏によつて処女塚古墳が報告されている。

このような官公署の手による調査が進む一方で、地面に露出した遺物を集めてこつこつと記録を残している在野の研究者の存在も忘れてはならない。そのような研究者の一人、紅野芳雄氏は家業を宮むか

たわら、阪神間をくまなく歩き回つて遺物採集を行なつた。氏の踏査記録「考古小録」には採集の記録が周辺の状況と合わせて詳細に記されている。この「考古小録」は、氏の他界後、西宮市議会の手によって出版されたが、今では市街地化して全くかがえない遺跡も多く、その当時の様子を数多く伝えており、今もなお多大な恩恵を現在の研究者にもたらしている。在野研究者の熱意や思ひを、といふえよか。現在の東灘区における記述の中では、大正五年に行なわれた岡本八幡谷古墳の発掘調査記録が特に貴重であろう。

昭和に入ると、青銅器の発見が相次ぐ。昭和九年、住吉村の溝が森で道路の補修工事中に銅鐸が出土した。これを受け、兵庫県でも大正十五年に委員会を置いて調査が始められ、その成果は現在の調査と同じように「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書」(全十六冊)にまとめられ、刊行された。古墳、陵墓、寺社などの史跡や名勝、天然記念物の調査研究がその主な内容であるこの報告書の第四輯には、渡辺多仲氏によつて処女塚古墳が報告されている。

さうして昭和十六年に、保久良神社境内の西側の畠から銅戈がみつかった。保久良神社はかねてから多くの遺物が採集され、また古代の祭祀遺跡である磐座と考えられる巨石群があることと知られていたが、銅戈の発見を受けて同年、国学院大学の樋口清之氏らが境内を調査し、磐座の一部を発掘したほか数多くの遺物を採集した。また昭和十八年には小林行雄氏を中心に銅戈出土地点周辺の発掘調査を行なっている。この調査の成果の一部は、調査に参加し

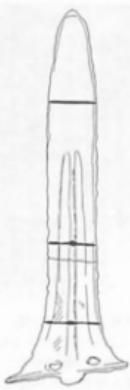
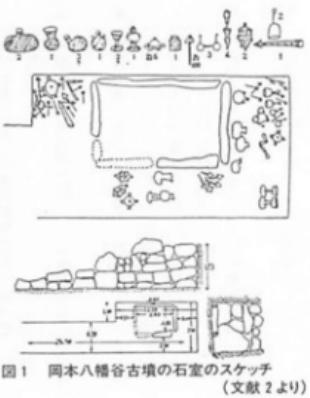


図2 保久良神社出土銅戈

これらの遺跡は、当時の文化財保護に対する認識の低さから調査されることなく、多くは破壊の憂さ目に

(註)

① 川辺賀武「保久良神社境内の出土品」『保久良神

社の研究』、神戸史談会、一九四一

② 岩谷千舟「保久良神社の磐境の老樹」『保久良神

社の研究』、一九四一

③ 藤川祐作「文献『考古小録』の再認識」『八十塚

13号墳の測量調査』、一九七三

④ 八幡谷古墳・岡本の八幡谷にあった円墳で、一

九一七年に発掘され、横穴式石室から骨や杏葉

などの馬具のほかに鉄錐や須恵器などが出土し

ている。現在は消滅。なお、「神戸・明石関係考

古文文献目録」記載の文献『京都大学文学部博

物館考古学資料目録』2(一九六八)のなかに、

「神戸市東灘区本山町田辺古墳」とあるが、こ

の古墳が八幡谷古墳のことを指しているのかも

しれない。追って確認したい。

⑤ 笠井新也「銅鐸の異例」『考古学雑誌』二二一

六 一九三三 梅原末治「有環銅鐸の新発見」『歴史と地理』三

三一四 一九三四 藤天然記念物調査報告書』第十一輯、兵庫県一

直良信夫「紹介・有環銅鐸の新発見」『考古学』

五一五 一九三四 梅原末治「住吉村新発見の銅鐸」『兵庫県史蹟名

勝天然記念物調査報告書』第十一輯、兵庫県一

吉井良尚「保久良神社新発見のクリス型銅劍」『神

戸史談会会報』一九四一

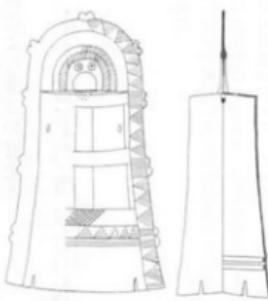
吉井良尚「保久良神社新発見の御祭神について

付・銅劍の発見」『振盪史跡研究』一九四一

三木文雄「保久良神社藏銅戈」『桜ヶ丘銅鐸・銅

戈』、兵庫県教育委員会、一九七一

図3 溝ヶ森銅鐸



じめとする神戸史学会の方々に深く感謝致します。記されているが、今後の資料整理の進展に大きな期待を寄せたいと思う。

(つづく)

昭和五十九年神戸深江生活文化史料館で展示された坂下山遺跡は、後の検討で高地性集落の一つと考えられている。またグループの中心メンバーの一人藤川祐作氏の収集された資料は、消え去った遺跡の断片を物語つており貴重である。これらの一部は、

昭和五十九年神戸深江生活文化史料館で展示された坂下山遺跡は、後の検討で高地性集落の一つと考えられている。またグループの中心メンバーの一人藤川祐作氏の収集された資料は、消え去った遺跡の断片を物語つており貴重である。これらの一部は、

- ⑩ ⑪ 渡辺多仲「萬原ノ丸女塚」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書」第四輯、兵庫県、一九二七
⑪ ⑫ 紅野芳雄「考古小録」西宮史談会、一九四〇
⑫ ⑬ 藤川祐作「文献『考古小録』の再認識」『八十塚13号墳の測量調査』、一九七三
⑬ ⑭ 八幡谷古墳・岡本の八幡谷にあった円墳で、一九一七年に発掘され、横穴式石室から骨や杏葉などの馬具のほかに鉄錐や須恵器などが出土している。現在は消滅。なお、「神戸・明石関係考古文文献目録」記載の文献『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2(一九六八)のなかに、「神戸市東灘区本山町田辺古墳」とあるが、この古墳が八幡谷古墳のことを指しているのかも知れない。追って確認したい。
⑭ ⑮ 「保久良神社」「山田博雄収集資料目録」辰馬教育委員会、一九七一
⑮ ⑯ 村川行弘「兵庫県神戸市生駒遺跡」「日本考古学年報」一七日本考古学協会、一九六四年
⑯ ⑰ 村川行弘「神戸市東灘区本山町字生駒出土の銅
鐸」「考古学雑誌」五一一、一九六五
⑰ ⑱ 草野豊「神戸市東灘区における銅器の発見」「古代文化」一四一、一九六五
⑱ ⑲ 村川行弘・三木文雄「生駒出土の銅鐸」「桜ヶ丘銅鐸・銅戈」兵庫県教育委員会、一九七一
⑲ ⑳ 藤川祐作「神戸市東灘区坂下山町採集の須恵蓋について」「芦の芽」二七号、一九七五
⑳ ㉑ 藤川祐作「神戸市東灘区坂下山町採集の須恵蓋について」「芦の芽」二七号、一九七五
㉑ ㉒ 藤川祐作「神戸市東灘区坂下山町採集の須恵蓋について」「芦の芽」二七号、一九七五
㉒ ㉓ 森岡秀人「東六甲の高地性集落(中)」「古代学研究」九七、一九八二
㉓ ㉔ 森岡秀人・古川久雄「東神戸の考古学」「生活文化史」別冊三号、神戸深江生活文化史料館、一九八四

天正十七年の芦屋川水論について

館長代行 大国正美

はじめに

芦屋川は旧芦屋村の中を南北に流れる川で、江戸時代には芦屋村はもとより、旧打出村・三条村・津知村の芦屋市域の村々や、旧深江村を初めとする東灘区の村々の貴重な灌漑水源であった。このうち深江村・中野・三条・津知・森の川西地区の各村は山芦屋町にあつた一の井手から取水し東川用水を通じて配水していた。

江戸時代の貞享四年（一六八七）決まつた水利慣行が「東川用水番割帳」という史料として残つてゐる（『新修芦屋市史』資料篇二一三四〇頁）。これは初日は中野、二日目は深江というように五カ村が交替で取水する。十二日間で一遍しその後はこの繰り返しとする（別表）。また三条村の畦垣内・觀音田には毎日配水するなど、優遇する。降雨で番が破れた時には番頭の中野村からやり直しとする一となつていた。当時川幅は現在より遙かに大きく、江戸時代中期の明和六年（一七六九）、芦屋村から代官所に提出された「差出明細帳」（『新修芦屋市史』資料篇二一五九頁）によると「芦屋川幅、往還筋二而六拾間、下通二而九拾間、長十六町」という想像を絶する大きさであった。

もちろん用水としての利用が江戸時代に始まるのではない。中世には川の両側に井堰が設けられ、取

水が行なわれていた。この小論では、新史料などをもとに、中世から近世への移行期の水利慣行と紛争について検討を加えた。

天正年間の紛争の新史料

さて、この芦屋川の水利慣行に関する史料の初見は天正十七年五月のものである。それが次の史料である（『新修芦屋市史』資料篇一）。

史料①

今度芦屋川水出入候處、山路庄中御年寄衆為御扱、川西川東之水日數相定申事

一、川西市之井手へ三十日に付て拾三日に参申

一、川東二之井手三の井手へ三十日に付て十七日に参申

一、右三ヶ井手の中よりぼうぞ井手へ一日二付て二

反水づゝ上申、同一日二付一反水づゝ年寄ニ給水

二入申候、同二の井手の下水も同水ニ相究申事

右是ハ、芦屋之年寄同下百姓迄相談仕候て相定申、此上ハ少もいらん有間敷候、為後日状如件。

天正十七年五月十七日 芦屋村年寄中
左京介 花押
猿丸太夫 花押
太郎右衛門 花押
与左衛門 花押
源左衛門 花押

別表

村名	取水日
中野村	1・5・11
深江村(東)	2・6
同村(西)	3・7
森村(東)	4・8
同村(西)	9
三条村	10
津知村	

(12日で一巡)

さて二通の史料は、差し出し人は同じだが宛名は若干の食い違いがある。史料①の「横田又右衛門」

一、芦屋の庄ミニツ申分候處を、山路乃年老衆御いるとしてすわり申。

一、いちノにて廿日三ツ十二日まとい申。

一、かわよりひかし、にのいて・そうのいはせ日二ツ十八日まい申候。但かわよりひかしノミツの内からおうそのミツ二反つゝあけ申。

此うへ芦屋打出年老衆あひすまし、いらんあるましく、為其如此にて候。

右天正拾七年五月廿七日

芦屋年老中

左京介

猿丸太夫

太郎右衛門

与左衛門

猪兵衛

源左衛門

藤次郎介殿

宗くわん殿

北右衛門殿

此御あつかいノ御衆として

この史料は、昭和十七年頃、本庄村史の編纂を依頼された松田直一氏が「武庫郡本山村役場」と印刷した郵紙に筆写し、「水利資料」という題名の書簡に

まとめたもので遺族が保存されている。残念ながら史料の伝来形態や所蔵者は不明である。おそらく松田氏が見た史料そのものが既に後世の筆写史料だつたと考えられる。このため一般史料とは言えないが、その意味では史料①や後に掲げる史料②と後世の筆写であり、とりあえず参考資料として検討を加えた。

で用水の配分を巡って緊張関係があることが分かる。

なお、前掲の芦屋村「差出明細帳」によると、「住吉屋次介」が、史料②では「よこ田又右衛門」

「藤次郎介」になつており、新たに「北右衛門」が加わっている。このうち藤次郎介（藤次介）は史料①から考へて、住吉の住人であろう。横田についても同じく住吉の関係者と推定している。というは

水利紛争から三十年前の永禄十二年（一五六九）十一月の「南郷春日社御水供料帳川山路庄公事錢取納帳」（兵庫県史、史料編中世二所取）に住吉村の有

力土地所有者として横田姓の三人の名前が見え、外に該当者がないからである。なお「新修芦屋市史」の「又右衛門」という判読は、市史編集の際に撮影した写真で見る限り疑義があり、「又右衛門」と読む方が妥当とも思えるが、史料に当たる段階まで最終判断を延ばしたい。また「取納帳」には横屋村に「北右衛門」という名前がある。「宗くわん」は野寄村の高井宗官である。

二、の井手、三の井手の区別をせず、「かわよりひかしノミツ」とまとめているからである。

天正の芦屋川水利慣行
一、市ノ井手毫ヶ月ニ水參候日数

それでは、当時の水利慣行はどうだったのか。それを示すのが次の史料である（同資料篇一）。

史料③

芦屋川水之割事

一、市ノ井手毫ヶ月ニ水參候日数

一一番二たうノいてへ參候 其月朔日 十四日

二二番二中ぞへ參候 廿八日

三三番二かいちミそへ參候 同六日 十九日

四四番二北ミそへ參候 同九日 廿二日

五五番二かいもりへ參候 同十日 廿一日

六六番二毫ヶ月ニ水參候日數之事

一一番二八田へ參候 其月ノ二日二

二一番二石つかへ參候 同五日二

三番二打出あれちへ參候 同八日二

四番二ふなどへ参候

同十二日二

五番二打出野田へ参候

同十六日

六番二ちおとへ参候

同廿日

七番ニ北ふなどへ参候

同廿三日

八番ニ打出山ノ口へ参候

同廿五日

三番ニ井手老ケ月ニ水參候日數之事

一一番ニけかゝねへ参候 其月ノ三日一二

二番ニきしノうへ参候 同七日二

三番ニ田中へ参候 同十日

四番ニちゝつかへ参候 同十三日

五番ニいのしりへ参候 同十五日

六番ニおさきへ参候 同十八日

七番ニたてはらへ参候 同廿一日

八番ニけれうへ参候 同廿六日

右三ヶ井手之水之内よりすべ水參候覧

其井手へ一へん水入渡シ、二へん參候時其所々

にてすへ水入申候

一、川西にてハはいはらノ田地へすべ水參候

一、川東ニ而すべ水之事

一一番ニたつミへ参候

二番ニ山かとへ参候

三番ニミやつかへ参候

四番ニもちうへ参候

天正拾七年五月廿七日

芦屋庄年寄中

ここに上げられている地名のほとんどは小字名であり、明治八年の猿丸又左衛門氏の芦屋村「改正字限絵図」や明治三十一年九月の「武庫郡打出山面図」（いずれも細川道草著「芦屋郷土誌」参照）で探すことができる。小字の境界は中世と明治年間とは食

い違うだろうが、所在地はさほど異ならないとみてよからう。それでは明治年間にも残る小字名を列挙してみよう。

①の井手関係

北溝・開森・芦屋村

②の井手関係

八田・船戸・北船戸・地王堂（ちおと）・芦屋村

打出荒地・打出野田・打出山ノ口・打出村

③三の井手關係

毛賃金・田中・井の尻・芦屋村

④川東のすべ水

辰巳・山角・芦屋村・宮塚・持湯一打出村

残った小字についてみると、一の井手の「かいら

ミそ」については、三条村の南垣内に比定しておきたい。細川道草氏の「芦屋郷土誌」によると、南垣

内について、「古名かいち、中世ごろより周囲に垣をめぐらし、生活の一単位とした場所。この辺は人烟密集し、三条村の中心地なり」と書いている。三条

村は中・近世では本庄の一部であり、「かいち」が三条村南垣内であれば、一の井手の本庄の水利権が

中世までさかのぼることがはつきりする。また三の井手の「ちゝつか」については、同じく細川氏が芦

屋地名考(三)（兵庫史学一〇）の芦屋村小字「德塚」の解説の項で「天正十七年芦屋川水之割據三ノ

井手四番にとくつか（ちゝつか）見ゆ」としている。

しかし史料③を写真版で見る限り、「ちゝつか」は誤

讀であり、「とくつか」と判読できる。以上を地図に

落とすと図1のようになる。この結果現在見当がつかないのは、一の井手の「たうノいて」「中ぞ」、二

の井手の「石つか」、三の井手の「きしノう」へお

さき」「たてはら」「けれう」だけである。なお芦屋村に「岸の下」があるが、川西地区であり「きしノう」との関係は不明である。冒頭に示した江戸時代の水利慣行と、天正年間の水利慣行とは、地図で見えて分かるように、まるで違っていた。また天正年間、取水する田畠を小字単位まで指定していることは、具体的には取水日に堰を設けて水を引き入れ、それ以外の日には堰をあけて下流域に取水させるという方法だつたと考えられる。その背景には、小字単位に配水する水利施設があり、普段は川の水は余り多くなかつたことが推定できる。

以上の検討から明らかになつたことを列挙してみる。

①天正十七年に起きた紛争とは、川西と川東の水の配分の日数を巡るものであった。そこで決められた

水利慣行とは、一月間を単位に、取水する田畠と日を、原則として小字毎に指定することであった。

②近世には本庄は一の井手に対し強固な水利権を持ったが、天正年間においては、一の井手が取水でき

る十三日のうち少なくとも四日間は芦屋村の田畠に

配水していた。それだけ天正段階の本庄側の水利権は限定的であったといえよう。

これらのことから、天正の水利紛争の背景を考えてみると、まず芦屋村の相手が本庄だと断定するのは早計である。史料③で打出村の小字には原則として打出を冠していることや川西地区の取水日を減らそうとしていることから、むしろ打出・芦屋村の芦

たと考える方が妥当ではあるまい。そう考えると

- ① いすれの史料にも本庄が出てこない。
- ② 曰數定に芦屋村の年寄から下百姓まで加わって懇の合意として決められている。
- ③ 史料①に「年寄二給水二入申候」とあるのは、芦屋村の年寄と平百姓・下百姓（打出村を含む）間に合意が成立したことを意味する。

- ④ 史料②に「かわよりひかしノミツの内からおうそミツニ反つゝあけ申」という記述も川東の果たすべき義務を川西の農民に明言したものと考えられる。

以上のように打出村を含んだ芦屋庄内部（川西と川東）での配分争いとすれば、史料が最も合理的に説明できるのである。

尤も、芦屋村は打出村に対し芦屋川の水利権については圧倒的な優等権を持っていたから、天正十七年の紛争は、事実上は芦屋村内部の対立だったといえる。

以上、主に新史料の紹介と、それをもとにこれまでより一步踏み込んで考えてみた。まだ仮説に過ぎないが、史料解釈や小字の追及をもとに分かつた事実を、解釈する結論として、今はこう考えておきたいたい。（一九八九・九・二十五）

- | | | | |
|-------|-------|------|----|
| ① 南垣内 | ⑩ 德塚 | 中地湯巳 | 金 |
| ② 北溝 | ⑪ 田 | 荒持辰巳 | |
| ③ 開森 | ⑫ 地王堂 | 氣八 | 宮塚 |
| ④ 地王堂 | ⑬ 船戸 | 野田 | |
| ⑤ 船戸 | ⑭ 野田 | 山口 | |
| ⑥ 野田 | ⑮ 井の尻 | 井の尻 | |
| ⑦ 山角 | ⑯ 山角 | | |
| ⑧ | ⑰ | | |
| ⑨ | ⑱ | | |



西岡本遺跡発掘調査中間概要2

六甲山麓遺跡調査会

一、はじめに

このたびの報告は、前回報告した調査地区からひきつづき実施している上段地区（I区）の調査概要である。この地区からは、掘立柱建物跡などのビック群、水田跡、古墳、縄文時代早期の堅穴住居址などを探出中である。また、中世頃の石工の作業場跡があつた痕跡も確認している。掘立柱建物跡のビック群には、その石工の作業場に関係あるものもあると思われるが、いまのところ検討できていない。古墳も十数基確認しているが、調査継続中のため報告するまでにいたっていない。そこで、今回は水田跡と縄文時代の住居址について、その概要を述べることとし、古墳やビック群などは次回にまわしたい。

二、調査地区割について

今回報告する調査地は、二ヶ所にまたがっている。すえに面積が広く、地形も起伏に富んでいたため図1のようないくつかの地区割を行なった。

調査地は地形の関係上、調査を二回に分けて行なっているため、大きく二分し、上段地区をI区、下段地区をII区とした。I区はさらに、東地区と西地区とに分け、西地区的三段の段差は上・中・下段に細分した。

ここで取り上げる水田跡はI区西地区下段から、

縄文時代の住居址はI区東地区から検出した。

三、水田跡

この遺跡は、I・II区合わせて今までに十数基の古墳を確認しているように古墳時代後期には一大群集墳が形成されたが、夙くも平安時代後半には古墳がつぶされはじめ、II区とI区下段の土地が種々に成形され、水田や畠地に再開発され始めたようである。そして、幾度か土地の改変が行なわれ、あるときは広く、あるときは小さく区切られた水田経営がつづけられたことが窺える。西地区下段から確認した水田跡は、そのような水田経営によるもの一つである。

水田跡は、一部近世の擾乱があつたり、遺構面を全掘できなかつたため、水田遺構の範囲や大きさは不明である。耕作痕である鋤跡や足跡は堆積土上に画された長軸線に沿つて東西方向に残つており、西側が自然消滅する形でとぎれていた。こうした耕作痕は写真のように二方向認められ、その範囲は南北六m、東西一二m以上におよんでいる。なお、この水田跡にともなう畦の検出はできなかつた。

四、縄文時代早期の住居跡と石器

縄文時代早期の住居址は、I区東地区から検出した。この住居址は、住吉川扇状地の最高位から少し下つた標高七四mの南向き緩傾斜地につくられた堅穴住居（図2）である。住居址は調査地の東側境界部分に位置しているため、その西半分しか発掘できなかつたが、前後二回につくりかえられた大小二棟



水田跡の跡・足あと検出状況（I区西地区下段）

の住居址を発掘した。大の住居址をSA-1、小の住居址をSA-2として以下にその概要を記す。

SA-1は、その南北分が近世の削平をうけているため四分の一程の床面しか検出できなかった。その平面形は直径約三・四mの不整円形か、あるいは北西-南東に長軸をもつ楕円形が考えられる。住居址北側の壁高は二五cmをばかり、壁周に沿って直径約十cmの杭穴が二十-三十cm間隔でめぐらしている。杭穴はわずかに住居址の外側に向かって打ち込まれており、住居址の周囲に組まれた垂木状柱の痕跡と考えられる。そして、それから考へられる住居の形態は、図3に示したように、その柱の先端が住居址の中央で円錐形状、あるいは穹窿状に組まれた上屋

構造が想定できよう。

SA-2は、SA-1より十cmほど深く掘り下げ

されていたため、近世の削平が床面にまでおよんでおらず、住居址の西半分を検出できた。住居址の平面形は短径二m、推定長径二・三mの東西に長軸をもつ楕円形を呈するものと思われる。住居址の壁周には一部に垂木状柱痕を認めるが、全周していない。

柱穴としては西寄り中央に直径二十cm、深さ一五cmのビットを検出した。これと対になる柱穴が東側にあるとすれば、主柱穴の一つを考えることができよう。床面は南に緩く傾斜している。

この二棟の住居址は埋土の層序からSA-2が古く、SA-1が新しい前後関係があり、その北壁を

共有する形を呈するところからあまり時間をおかず

に小から大へと拡張されたものと思われる。

なお、発掘できた範囲からは炉跡等の施設は検出しなかつた。

出土遺物には外面に楕円押型文、内面に斜行沈線が施された土器とサヌカイト剝片がある。土器はその文様に加え、器壁が一cm余りの厚みをもち、胎土に纖維が混入することから、縄文時代早期後半の高山寺式に比定される。石器は剝片が小量出土しているものの、製品はいまのところ未検出である。それらの遺物はほとんどSA-1から出土し、SA-2からの検出は皆無に等しい。

以上、住居址の概要についてみてみたが、集落の



図1 調査地の地区割図



縄文時代早期の住居址(I区東地区)

範囲や規模、住居址の構成などは今後の周辺の調査を待たねばならない。

次に石器類の出土状況について簡単に見ておこう。西地区およびII区西側からは、押型文土器にとまう時期の石鏃やその未製品、剝片などを多数検出している。しかし、東地区からは住居址を検出し

たにもかかわらず、住居址内はもとより石器の出土はほとんど見られない。こうした石器の分布は、縄文時代早期の遺物包含層が残っていないため詳細は分からぬが、集落内における石器製作のあり方を示唆するものであるのかもしれない。ほかには、クサビ形石器、磨製石斧、磨石、石皿などが出土して

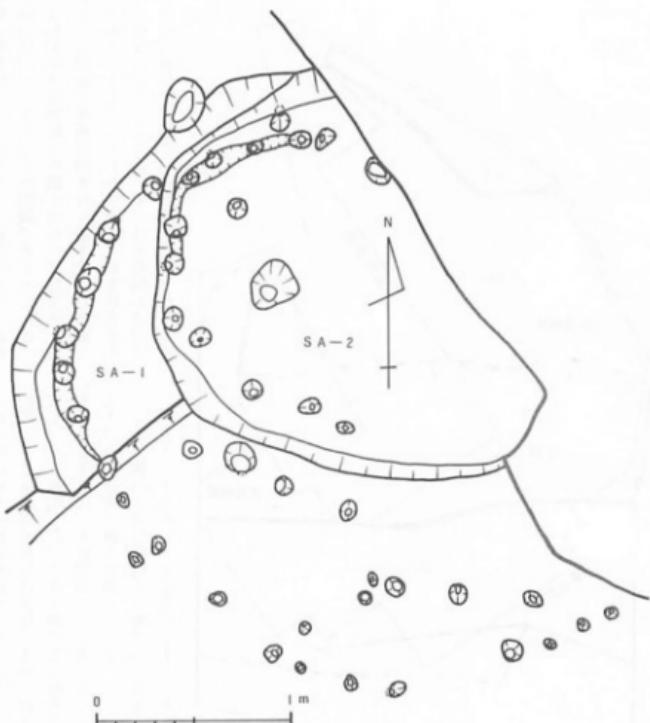
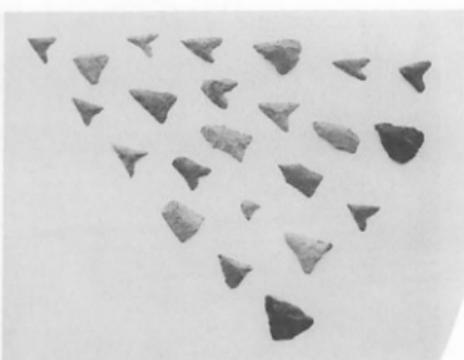


図2 縄文時代早期住居址平面図

いるが、石鏃の占める割合が多いのもこの遺跡の一つの特徴といえよう。

近畿地方において縄文時代早期の住居址が発掘された遺跡は、奈良県・大川遺跡、兵庫県・上ノ山遺跡、三重県・大鼻遺跡、同・西出遺跡などが知られている。しかし、高山寺式段階の住居址は未検出である。高山寺式土器の分布は近畿地方を中心にして日本から西日本にまで広範囲におよんでおり、東日本はもとより西日本でも岡山県・竹田遺跡、広島県・松ヶ迫遺跡、島根県・堀田上遺跡などから高山寺式段階の住居址が検出されている。

これら縄文時代早期の遺跡における住居址の形態や集落のあり方を検討し、西岡本遺跡と比較考察することが次の課題である。



I区・II区から出土した石鏃

五、六甲山南麓の縄文早期の遺跡

まとめて代えて六甲山南麓の縄文時代、早期の遺跡を概観しておこう。

六甲山南麓は、六甲山から流れ出る河川によって扇状地が形成され、なだらかな傾斜をもつ狭長な平野が大阪湾に沿って展開されている。山海の自然の恵みを追い求めて生活していた縄文人にとって、この猫の額ほどのわずかな空間は、前面に海の幸、背面に山の幸を控えた一等地であったことはいうまでもあるまい。近年の発掘調査によつて数多くの縄文時代の遺跡が検出されていることは、このことを如実に物語つているといえよう。そうした中、縄文時代早期の遺跡の実態も明らかになりつつある。

管見に触れた縄文時代早期の遺跡を列举してみる

と、須磨区・境川遺跡、中央区・宇治川南遺跡、灘区・神前遺跡、東灘区・郡家遺跡御影中町地区、同・岡本九丁目遺跡、芦屋市・山芦屋遺跡をあげること

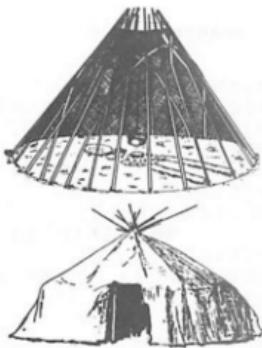


図3 垂木状柱で組まれた住居址 2種
(図説 世界文化史大系1より)

ができる。さらに、灘区・桜ヶ丘申新田の山中に同期の石器と鉄片が散布するところがあり、これも遺跡として加えることができよう。これらの遺跡はすべて押型文の段階のもので、いまのところそれ以外の早期の遺跡は確認されていないようである。

それらの遺跡の内容については、調査中あるいは未報告の遺跡が大半を占めるところからこでは控えておくが、縄文人は当初から六甲山南麓に集落をかまえ、海に山に活動していた様子をうかがうことができるようになつた。そして今後の発掘調査によつて、ますます縄文時代の遺跡があきらかにされるであろうし、六甲山南麓の縄文時代の様子が復元されれるのもそう遠いことではないであろう。

(文責 浅岡俊夫)

◇編 者 か ら ◇

☆昭和から平成—その他にもいろいろなことがあつた一九八九年もあとわずかとなりました。今年が後世の人々に、歴史上どのような位置付けがされるのか興味深い気がします。

☆史料館は今年も活発な活動ができたのではないかと思います。春の特別展について、秋の特別展むかしの農具」展も好評のうちに無事終了しました。協力いたいたい関係者各位に感謝申し上げます。一九九〇年度も、史料館の活動を通じて交流を深めたいと思いますので、よろしくお願いします。

☆史料館では、今後も充実した活動をつづけていきたいと思いません。みなさんのなかでいつしょに活動をしていきたいと思われる方がおられましたら、お気軽にお問い合わせください。お願いします。

【協 力 团 体】

神戸市教育委員会／神戸市観光課／芦の芽グループ

芦屋市教育委員会／国立神戸商船大学／東灘区役所

日本玩具博物館／御影高校地歴部／本庄五校園

神戸史学会／深江青少年協議会／サンチレビ

東灘文化センター／丸百貨店

深江ショッピングセンター／明石市立天文科学館

理 事：磯辺 信三／大國 正美／太田垣正雄

小嶋 悅郎／坂上和三郎／志井 正夫

志井 保治／杉浦 昭典／田辺 真人

館長代行： 松尾 福夫／深山 健二

事務局主事： 阿部 英子

主任研究員： 望月 浩

研究員：伊東 玲子／田部美知雄／藤川 祐作

道谷 車／望月 友二／山本 文雄

調査員：大塚 康弘／柏原 正民／西村 敦

事務局員： 中島 薫

友の会幹事：小嶋 悅郎／志井 保治／寺岡 一夫

門前 喜康／吉川 永子／磯辺 信三

大川 弘／佐野 末夫／佐原 浩平

納多 春雄／清水 久雄／多田 康治／田辺ゆかり

研修会への館員派遣

- S 63. 10. 28
63年度 博物館協会 第2回研修会
見学会 赤穂市立海洋博物館
赤穂市塩業資料館
赤穂市民俗資料館
上郡町郷土資料館
(派遣館員 研究員 道谷 卓)
H元. 6. 20
元年度 博物館協会総会・研修会
総会 決算報告・事業計画
見学 特別展「中国、唐・長安の文物」
(派遣館員 研究員 道谷卓・山本文雄)

資料寄贈者御芳名

昭和63年10月以降
敬称略

- 〈資料〉
法柏信明・除草器他4点/多田万次郎・
ラジオ/山田芳郎・テーブレコーダー/
岡田博・外套・清水久雄・軍足/竹内孟
男・フィゴ/御影高校図書館・戦前朝日
新聞縮刷版/大西真美・かのこ他2点

〈書籍〉

神戸市教育委員会・岡方文書第五輯第一
卷第二巻・神戸市文献史料5~9巻・写
真集神戸100年

鴻山俊雄・神戸の外国人他7冊

兵庫紙幣史編纂室・兵庫紙幣史の研究9
~12号

東大阪市立郷土博物館・もめんいろいろ
他3冊

城崎文芸館・城崎の美

尼崎文化財収蔵庫・尼崎の絵馬

落合重信・ひょうごの地名再考

丹青純合研究所・園圃都市

尼崎市立地域研究史料館・地域史研究18
巻2号

神戸史談会・神戸戸談230・238~265号
宝塚市史資料室・市史研究紀要からづ
か6号

西宮市立郷土資料館・西宮の歴史

野洲町立歴史民俗資料館・常設展示図録

高谷昌良・芦屋の山

兵庫県立歴史博物館・塵界創刊号

芦屋市・芦屋市文化財調査報告、芦屋市

水道通水50年史

生田神社・生田神社史上、中、下

大阪人権歴史資料館・発禁書と言論出版
の自由他2冊

竹中大工道具館・竹中大工道具館展示解
説書他2冊

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

S 63年

- 10月10日 友の会 第54回例会(参加者110名)
第6回魚屋道を歩く会 案内 田辺眞人氏 望月 浩氏
10月15日 友の会 第55回例会(参加者50名)
講演「ニュージーランドと日本」
田辺眞人氏 於、東灘文化センター
10月23日 友の会 第56回例会(参加者77名)
バスツアー「吉宗のふる里和歌山を訪ねる」
講師 田辺眞人氏 道谷 卓氏
11月27日 友の会 第57回例会(参加者70名)
見学会「東灘歴史散歩」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏

H元年

- 1月18日 東灘小学校 3年生(見学者 190名)
1月21日 本山南小学校 3年生(見学者 107名)
1月22日 友の会 第58回例会(参加者31名)
神戸史学会第28回例会
講演「東灘区における考古学研究史について」 柏原正民氏
「保寧の史的考察」 道谷 卓氏
1月24日 本庄小学校 3年生(見学者 181名)
1月28日 本山第三小学校 3年生(見学者 127名)
2月4日 鶴影北小学校 3年生(見学者 166名)
2月16日 福池小学校 3年生(見学者 103名)
2月17日 魚崎小学校 3年生(見学者 226名)
3月5日 友の会 第59回例会(参加者20名)
史料館開設8周年記念・友の会総会
3月12日 友の会 第60回例会(参加者28名)
神戸史学会第29回例会
講演「農業土木と地名」 片岡善龜氏
「戦国武将・荒木村重の史料」 瓦田 昇氏
4月16日 神戸こどもを守る会(見学者14名)
4月29日 1989春の特別展「東灘の歴史」展(~6月25日まで)
6月23日 東灘区役所新規採用者研修(見学者25名)
6月24日 福池小学校 6年生(見学者116名)
7月9日 友の会 第62回例会(参加者80名)
「日本史の中の東灘」出版記念講演会
道谷 卓氏 於、東灘文化センター
7月23日 友の会 第63回例会(参加者32名)
バスツアー「播州赤穂の旅」 講師 道谷 卓氏
9月23日 友の会 第64回例会(参加者81名)
バスツアー「柳生の里を訪ねる」
講師 田辺眞人氏 道谷 卓氏
10月1日 友の会 第65回例会(参加者80名)
講演「ニュージーランドと日本」
田辺眞人氏 於、東灘文化センター
10月7日 1989秋の特別展「ぬかしの農具」展(~11月26日まで)
10月10日 友の会 第66回例会(参加者61名)
第7回魚屋道を歩く会 案内 望月 浩氏
11月3日 友の会 第67回例会(参加者120名)
見学会「史跡ウォッキング」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏
11月5日 友の会 第68回例会(参加者40名)
講演「外から見た日本文化と神戸」
田辺眞人氏 於、神戸市民生活会館
11月18日 小部東小学校 3年生(見学者101名)
11月19日 友の会 第69回例会(参加者40名)
見学会「東灘歴史散歩」 講師 道谷 卓氏 望月 浩氏